

大学生生活上の困難感へのAD/HD特性の影響¹

今西 惇・大久保 純一郎

問題

DSM-5(American Psychiatric Association, 2013)によると、ほとんどの文化圏で、子どもの約5%および成人の約2.5%に注意欠如・多動症(Attention deficit hyperactivity disorder: AD/HD)が生じる。しかし日本学生支援機構(2014)の調査によると、日本全国の大学と短期大学に在籍する3,155,518名の学生の中でAD/HDの診断を有し、大学に支援を求めている学生は248名である。この数値は日本全国の大学生の約0.01%にすぎず、AD/HDを有するであろう学生(以下:AD/HD学生)の多くは、大学に把握されていないと言える。それらのAD/HD学生の中には、大きな困難を抱えているにもかかわらず、支援を受けることが出来ずにいる者が多くいる可能性がある。また、DSM-5(American Psychiatric Association, 2013)は自閉症スペクトラム障害(以下:ASD)との併存を認めており(樋口・斉藤, 2012)、このこともAD/HDの本来の姿がとらえにくいことにつながっていると考えられる。

他方、篠田・沢崎(2012)は、AD/HDに関して、青年期以降の診断基準は曖昧な部分が多いと指摘している。これらの事実も、AD/HD学生の把握とその支援が困難である原因の一つであると言えるかもしれない。AD/HD学生の支援においては、遠矢(2002)が指摘するように、診断の有無に関わらず、AD/HDの主症状を認識する人びとをスペクトラムとしてとらえ、通常の社会生活を送る人びとが抱える心理・行動的困難を明らかにした上で、心理臨床的の手がかりを得ることが重要であると考えられる。

AD/HD学生の困難感について

AD/HD学生の困難感に関する研究において篠田・沢崎(2012)は、不注意と多動性・衝動性という2つの主症状を中核とした問題により、教育的適応(学業成績や卒業率など)、心理適応(抑うつ傾向、自尊心の低さ)、社会的適応(運転に関する問題、薬物やアルコール依存)、対人関係(攻撃性の高さ、他者からの拒否に気付きにくいなど)、職業的適応などのさまざまな問題をAD/HD学生が抱えていると報告している。また、館農(2013)は、成人期のAD/HD者の中には社会生活で十分に能力を発揮することができず、また度重なる失敗から自己肯定感を持つことができず、うつ病や不安障害などの精神疾患を併存し安定した生活が困難となる者もいると述べている。このことは、大学生生活を送っているAD/HD学生に関しても同様であると考えられる。

AD/HD学生への支援について

AD/HD学生に対する支援に関して、篠田・沢崎・石井

(2013)は、注意に困難さのある大学生への進路決定に関する支援プログラムを実施している。このプログラムは、進路決定を題材にプランニングスキルの獲得と不安の軽減を同時に目指した週1回60分のセッション、全4回で構成されている。その結果、プランニングスキルの獲得は確認されたものの、不安については必ずしも軽減せず、ワークショップ開始時の不安得点が高かった者は得点が下がり、低かった者は上昇していた。さらに、課題の一つとして、どの程度の不安感、危機感を保つかという点が考察された。

金澤(2013)は、認知行動療法は、成人期のAD/HD患者に併存しやすい抑うつ症状や不安症状に対する治療として幅広く活用されている治療法であることから、AD/HD症状の効果だけでなく、併存症を含めた幅広い効果が期待されていると述べている。また成人期のAD/HDに対する認知行動療法は、問題解決的技法や思考記録法、スモールステップの原理などの一般的な認知行動療法の理論や技法を基礎としながら、「順序立てと計画性」、「注意持続訓練」などの成人期のAD/HDに特化した技法も組み合わせると述べている。

本研究の目的

以上に示したように、AD/HDの特性とAD/HDに併存する抑うつなどの症状に対し、注意力や物事の考え方や行動に注目し、その特性とうまく付き合っていけるような支援が行われている。しかし、AD/HD学生の困難感の多様性と比較すると、現在行われている支援やプログラムは対象とする範囲が限られていると考えられる。実際にAD/HD学生がどのくらいに在籍しており、また、どのようなことに困っており、どのような支援を求めているのかを把握することは、支援方法の幅を広げていくために重要であると考えられる。

そこで本研究では、AD/HD学生の在籍率について質問紙調査を行い、AD/HD傾向と日常生活上の困難感を分析するとともに、AD/HD学生への支援について検討した。

方法

対象者

近畿圏の大学生201名(有効回答186名、男性64名、女性122名:年齢18~24歳)を対象とした。

手続き

大学での、講義時間内に質問紙を配布、回収した。

質問紙

フェイスシートにおいて、学年、性別、年齢などを記入してもらい、1)AD/HDに関するチェックリスト、2)自閉症傾向

に関するチェックリスト, 3) 抑うつ傾向のチェックリスト, 4) 困難感に関する尺度, ならびに, 5) 困りごとに関するその他の質問について回答を求めた。

なお, 本研究では, 大学生生活上の困難感へのAD/HD特性の影響を中心に検討を行うこととするが, DSM-5 (American Psychiatric Association, 2013)より, AD/HDとASDとの併存を認められていることから, AD/HD学生の中にも自閉スペクトラム傾向を併存し困難感を抱えている学生が存在し, 併存症の有無によって困難感や支援のあり方が異なると考えられるため自閉症傾向に関するチェックリストも用いた。

また, AD/HD学生が抱える困難感によって, 抑うつ傾向や不安障害の傾向などの二次障害に発展しているかを調べるために抑うつ傾向のチェックリストを用いた。

1) AD/HDに関するチェックリスト AD/HD傾向を調べるために, AD/HD RS-IV日本語版(山崎他,2002)を使用した。この尺度は, 「不注意」因子(9項目), 「多動性・衝動性」因子(9項目)の18項目で構成されており, 「ない, もしくはほとんどない」～「非常にしばしばある」の4件法で回答を得た。

2) 自閉症スペクトラム障害傾向(以下:ASD傾向)に関するチェックリスト ASD傾向を調べるために, 自閉症スペクトラム指数の短縮版である「日本語版自閉症スペクトラム指数(AQ-J)16項目短縮版(栗田他,2004)を用いた。この尺度は「コミュニケーション」因子(7項目), 「想像」因子(4項目), 「注意転換」因子(3項目), 「ソーシャルスキル」因子(2項目)の合計16項目で構成されており, 「あてはまらない」～「あてはまる」の4件法で回答を得た。

3) 抑うつ傾向のチェックリスト 精神的な困難を調べるために抑うつ傾向に関するK6日本語版(川上・近藤・柳田・古川,2004)を用いた。この尺度は6項目からなっており, 「全くない」～「いつも」の5件法で回答を得た。

4) 困難感に関する質問紙 発達障害者が有する困難感について検討するために, 発達障害のある学生の困りごとに関するセルフチェックリスト(国立特別支援教育総合研究所・日本学生支援機構,2009)を使用した。この尺度は, 「学習困難」因子(10項目), 「注意・多動性」因子(7項目), 「抑うつ・不安」因子(4項目), 「対人関係困難」因子(10項目), 「読字困難」因子(2項目), 5因子38項目からなり, 「全く困っていない」から「とても困っている」の4件法で回答を得た。

5) 困りごとに関するその他の質問 大学生に大学生生活上の困り事の有無について, 「はい」「いいえ」の2件法で回答を求めた。さらに, その困り事について, 周りの人の手助け, または支援を必要としているか否かを, 「はい」「いいえ」の2件法で回答を求めた。支援が必要と答えた者には, 具体的にどのような支援・手助けを必要としているかについて, 自由記述での回答を求めた。

結果

AD/HDの傾向について

本研究では, AD/HDを疑うカットオフポイント(以下:CP)である16ポイント(山崎他,2002)以上の対象者をAD/HD学生として, 在籍率を算出した。CPを上回った大学生は48名で全体の25.8%であった(Table 1)。

Table 1 AD/HD学生の割合

人数	学生全体	AD/HD学生	%
男性	64	24	37.50
女性	122	24	19.70
合計	186	48	25.80

AD/HD特性が大学生生活上の困難感に与える影響

大学生生活上の困難感に, どの変数が影響しているかを検討するために, 発達障害のある学生の困りごとに関するセルフチェックリストの下位因子である「学習困難」因子, 「注意・多動性」因子, 「抑うつ・不安」因子, 「対人関係困難」因子, 「読字困難」因子をそれぞれ目的変数とし, 「性別」とAD/HD特性である「不注意」因子と「多動性・衝動性」因子を説明変数とする重回帰分析を行った(結果をパス図として示した(Figure 1))。

「学習困難」因子には, 「不注意」因子($\beta=.67$)が正の有意な影響を与えていることが示された($p<.01$)。一方, 「多動性・衝動性」因子($\beta=-.12$)と, 「性別」($\beta=-.02$)は有意な影響を与えていなかった。決定係数($R^2=.59$)は有意であった($p<.01$)。

「注意・多動性」因子には, 「不注意」因子($\beta=.61$)が正の有意な影響を与えていることが示された($p<.01$)。また, 「性別」($\beta=-.12$)では男性の方が「注意・多動性因子」に有意な影響を与えていることが示された($p<.05$)。一方, 「多動性・衝動性」因子($\beta=.01$)は有意な影響を与えていなかった。決定係数($R^2=.65$)は有意であった($p<.01$)。

「うつ・不安」因子には, 「不注意」因子($\beta=.41$)が正の有意な影響を与えていることが示された($p<.01$)。一方, 「多動性・衝動性」因子($\beta=.05$)と, 「性別」($\beta=-.03$)は有意な影響を与えていなかった。決定係数($R^2=.46$)は有意であった($p<.01$)。

「対人関係困難」因子には, 「不注意」因子($\beta=.48$)が正の有意な影響を与えていることが示された($p<.01$)。また, 「多動性・衝動性」因子($\beta=.19$)が正の有意な影響を与えていることが示された($p<.05$)。一方, 「性別」($\beta=.02$)は有意な影響を与えていなかった。決定係数($R^2=.63$)は有意であった($p<.01$)。

「読字困難」因子には, 「不注意」因子($\beta=.21$)と「多動性・衝動性」因子($\beta=.21$)が正の有意な影響を与えていることが示された($p<.05$)。一方, 「性別」($\beta=-.14$)は有意な影響を与えていなかった。決定係数($R^2=.41$)は有意であった($p<.01$)。

支援を必要と回答した大学生について

AD/HD学生がどのような支援を求めているのかを検討するために、困りごとの有無と、支援を必要としているか否かの回答を求めた。全ての学生(186名)のうち28名の学生(15.1%)が、支援が必要であると回答した。

AD/HD学生48名のうちでは、困りごとがあると回答した学生は20名(41.7%), 困りごとがない学生は28名(58.3%)であった。また、AD/HD学生48名のうちの割合では、困りごとがあり(20名)支援を求めている学生は8名(40.0%), 困りごとはあるが支援を求めている学生が12名(60.0%)であった。

次に、AD/HD学生48名のうちで、困りごとがあると回答したAD/HD学生20名(以下: 困りごと有群)と、困りごとがないと回答したAD/HD学生28名(以下: 困りごと無群)では、AD/HD特性の強さ、困難感の強さ(発達障害のある学生の困りごとに関するセルフチェックリストの総合得点)、また抑うつ傾向に差が出るのか否かについて検証するため、両群の平均値および標準偏差(SD)を算出した。その結果はTable 2に示す。また、両群のAD/HD特性の強さ、困難感の強さ、抑うつ傾向の平均値を対応のないt検定を用いて比較した結果、AD/HD特性の強さ($t(36)=0.05, n.s.$),

困難間の強さ($t(46)=1.50, n.s.$), 抑うつ傾向($t(46)=1.72, n.s.$), と、困りごと有群と困りごとなし群には有意な平均値の差はみられなかった(Figure 2)。

次に、必要とする支援の具体的な内容(自由記述)を8つのカテゴリーに分類整理した。カテゴリー名は、臨床心理士1名と臨床心理学を専攻している大学院生4名と共に検討した。支援が必要と回答した学生28名のうち、自由記述に回答した学生は18名であった。そのうち8名はAD/HD学生であった。また、AD/HD学生のうち、3名にASD傾向がみられ、1名は抑うつ傾向がみられた(Table 3)。

考察

AD/HD学生の在籍率について

本研究では、AD/HD大学生が全体の25.8%であることが示された。すなわち、4人に1人の学生がAD/HD傾向を持ちながら大学生生活を送っている事が示唆された。先行研究(e.g. 林, 2013; 大久保, 2015)でも本研究と類似するような結果が得られたことを報告している。これほどまでにAD/HDの疑いのある学生が検出されたのは、質問紙調査のみでスクリーニングを行ったことが要因の一つとして考えられる。金澤・白川・岡島・中野・坂野(2009)の研究では、成人

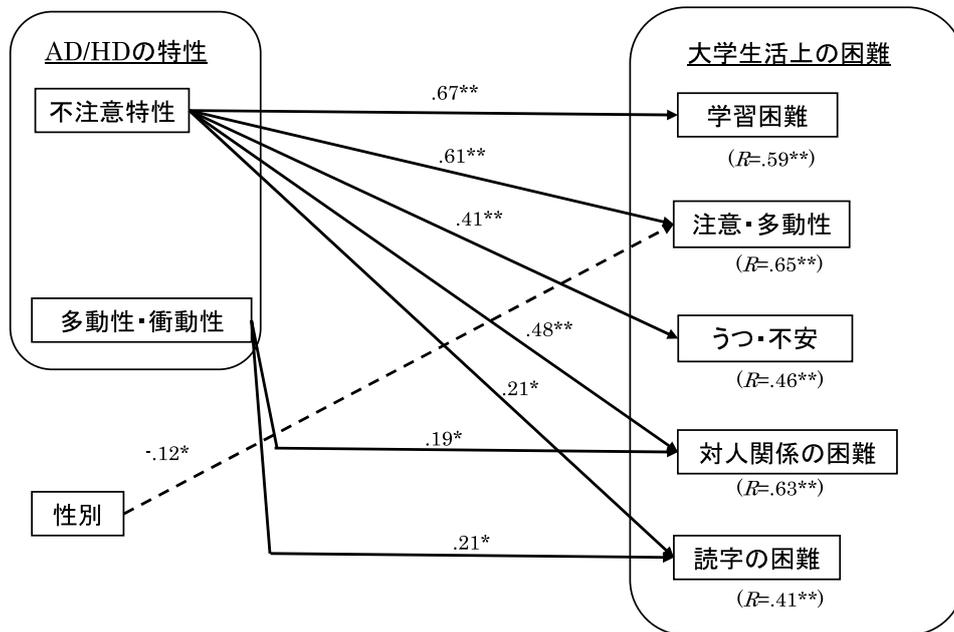


Figure 1. 大学生生活上の困難感に影響を与える諸変数に関するパス・ダイアグラム

* $p < .05$, ** $p < .001$. パス上の数値は標準偏回帰係数と決定係数を示す。有意なパスのみ表示した。実線は正の影響、破線は負の影響を示す。

Table 2 各群の平均値及び標準偏差

困りごと	平均値/SD		
	AD/HD特性	困難感	抑うつ傾向
有群(20名)	25.5±8.7	87.7±16.6	13.7±6.3
無群(28名)	25.6±7.1	80.6±15.6	10.5±6.5

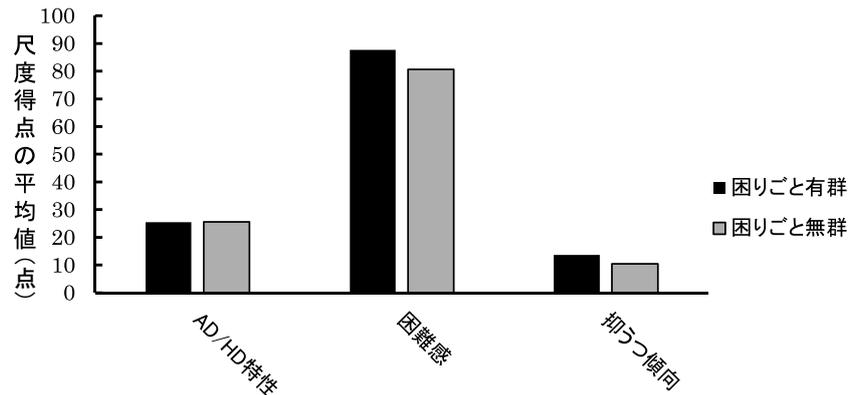


Figure 2. 両群の諸変数間の平均値の差

Table 3 支援・手助けを必要としている大学生の記述

カテゴリー	記述内容	発達障害傾向
学習	勉強についてのアドバイス	○, □
	テストをどう切り抜けるか	
	わかりやすく説明してほしい。 プリントの穴埋めを見せてもらう。	□ ○
自己管理	お金と時間がない。その状況で課題が出ると病む。	
	朝、目覚ましかけても起きれない。	○
対人関係	みんなの本当の気持ちを引き出してほしい	□
困惑	自分が何に興味を持ち、何をすればいいかわからない	
将来	将来が不安	
	就職について	○, □
発散	悩んだら話を聞いてくれる	○
	話を聞いてもらう。	
手段	話をきいてほしい。何かアドバイスを教えてもらいたい。	
	アドバイスがほしい	
	アルバイトの面接云々でどうすればいいか友人に聞く。	○, □
その他	ちょっとした面談	
	母に連絡	
その他(うつ)	寝さしてください。	○

○:AD/HD傾向 □:ASD傾向

18名

期のAD/HD症状を評価する自己記入式尺度の信頼性と妥当性を検討しており、自己記入式尺度のみのスクリーニングでは偽陽性率が高まることを報告している。このことから、本研究でも純粋なAD/HD学生のみを検出できなかった可能性がある。しかし、大学生の中には、AD/HDの特性として自覚し、学生生活上に何らかの困難感を感じている学生は多く在籍していることが示唆された。

AD/HD学生の困難感について

様々な大学生活上の困難感の強さの背景には、篠田・沢崎(2012)が報告したように、不注意と多動性・衝動性という2つの主症状が影響していた。主に、「不注意特性」が様々な困難感に影響していることが確認された。

特に、「不注意特性」が、「学習」に関する困難感に強く影響している可能性が示唆された。本研究では、「注意・多動性」面の困難感を上回る結果となった。篠田・沢崎・篠田(2015)は、勤勉性が獲得されなければ、劣等感をもち、学習や課題などにあまり興味を示さなくなってしまうことを指摘している。AD/HD学生の場合、学習面での度重なる失

敗体験を繰り返してきたことから、勤勉性が獲得されておらず、授業や課題に集中できないことが影響していると考えられる。また、大学生活上では、学業が日常の中心となることから、困難に感じる場面に直面しやすいことも関係しているかもしれない。

「注意・多動性」に関する困難感に影響がみられたことは、「不注意特性」が、実際に、日常生活の困難に関係していることを示していると考えられる。しかし、本研究では、「多動性・衝動性」の特性からの影響はみられなかった。中村(2016)が述べるように、大人になるにつれて不注意の症状がより問題になってきていることによると考えられる。物忘れ、紛失物の多さ、諸手続の期日を忘れてしまうこと、整理整頓の苦手さ、など特性が直接影響すると考えられる困難に対する対応が重要となろう。

「うつ・不安」に関する困難にも「不注意特性」の影響がみられた。「学習」に関する困難感や、「注意・多動性」に関する困難ほどの影響はみられなかったが、決して低くない結果であった。大学生活の中で、「不注意」特性の強さが背景

となる困りごとにより、二次障害に発展し、安定した生活が困難となる者が存在することを示唆された。

「対人関係」に関する困難には、「不注意特性」と「多動性・衝動性」の影響がみられた。篠田・沢崎(2012)の研究で報告、攻撃性の高さや、他者からの拒否に気づきにくいというように「多動性・衝動性」が背景となると考えられる。「対人関係」に関する困難感には、弱い影響が確認された。本研究では、「不注意特性」から中程度の影響がみられた。「不注意特性」の影響による「対人関係」に関する困難は、相手からの信頼を失う体験を重ね、自己評価が低下し、達成感を得ることが難しくなる。このような体験により、二次的に抑うつ気分や不安といった精神症状を呈したりすることで医療機関を訪れるケースも少なくない(中村,2016)。他方、大久保(2005)の研究から、「友人との関係」は、学生の学校への適応感に強い影響力があることが明らかにされている。AD/HD学生の大学生活への適応を考える上で、見過ごしてはならない点と言えよう。

一方で、「読字」に関する困難は、弱いながらも「不注意特性」と「多動性・衝動性」の両方から、影響を受けていた。文字を読む苦手さなどに、配慮が必要になるかもしれない。

AD/HD学生の困りごと・支援の必要性に関して

AD/HD学生の約半数(20名)が困りごとがあると回答し、残りの半数(28名)が具体的な困り事はないと回答する結果となった。しかし、2群に関して、AD/HD特性の強さ、困難感の強さ、抑うつ傾向の強さの平均値に有意な差は見られなかった。かつ、各群の困難感の強さと、抑うつ傾向の強さは、決して低い数値ではなかった。特に、抑うつ傾向は、9点以上であれば、50%の確率で気分・不安障害が認められるとされている(川上他,2004)。本研究では、困りごと無群も平均値を超えており、十分に抑うつ傾向が高いと考えられる。困りごとがないと回答した要因の1つは、困難感の意識化ができていないことにあるかもしれない。AD/HD特性のある学生の中には、自己の特性を意識していないために、不適応感を持ちながら生活を送っている者も少なくない(篠田・沢崎・石井, 2013)。自由記述の結果によると、AD/HD学生が求める支援は様々であり、それぞれにあった個別的支援が必要であることが示唆された。そして、ASDの傾向と併存しているAD/HD学生が本研究でも確認された(結果のTable 3参照)。彼らにはASD傾向を踏まえた支援を検討する必要がある。

また、ADHD学生の必要とする支援の中には、困りごとの具体的な解決法などのアドバイスを求めるものが多くみられた。つまり、彼らの用いている解決手段が不適切で効果的でないと考えられる。したがって、単なる助言ではなく、現在の解決手段を見直し、適切に困りごとに対処できるようスキルを向上させるプログラムの必要性が示唆されたと言える。

結論と今後の課題

本研究では、AD/HDの特性を自覚している大学生が、25.8%もみられた。また、彼らが抱えていると考えられる大学生生活上の困難感に関しては、主に「不注意特性」の影響を受けていることが示唆された。支援を必要としているAD/HD学生は、抑うつ傾向が強く二次障害が生じているものと考えられ、彼らのニーズに合った支援が必要である。また、自由記述の回答から、困りごとの具体的な解決法などのアドバイスを求めるものが多くみられたことも、AD/HD学生の支援のヒントになるだろう。

次に、本研究の課題点について記す。本研究では、先行研究から報告されている通り、AD/HDの中核症状が日常生活上の困難に影響していることが確認できた。しかしながら、「学習」に関する困難感と「注意・多動性」に関する困難感、「対人関係」に関する困難感などさまざまな困難に対して同じ程度の影響を示した。したがって、AD/HDの中核症状が持つ困難感への影響の中心がどの領域にあるのか、焦点が不明瞭になったと考えられる。つまり、AD/HD学生への支援の中心をどの領域におくべきか明確にすることはできなかった。また、自由記述に回答したAD/HD学生数が少なく、より具体的な支援方法を明らかにすることができなかった。今後、調査方法等を、再検討した上で、研究をすすめることが望まれる。

今後の展望としては、本研究では、困りごとのないAD/HD学生、困難感強いが自覚していないAD/HD学生、困りごとはあるが支援を求めている学生の存在が確認された。彼らの困難に対する考え方や、困難の解決の仕方などの特徴を明らかにすることは、AD/HD学生の支援を考えていく上で重要であると考えられるため検討していきたい。

註

¹ 本論文は、第一著者の2014年度帝塚山大学心理学部卒業論文の一部に加筆修正したものである。また、本研究の一部は、2015年度関西心理学会127回大会で発表された。

引用文献

- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: Dsm-5*. American Psychiatric Publishing.
 (高橋 三郎・大野 裕(監訳) (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル. 医学書院)
 林恭平 (2013). 潜在的発達障害を持つ大学生の相談施設利用に関する調査—対人恐怖心性との比較検討—困難感尺度の作成を通して—. 帝塚山大学大学院心理科学研究科修士論文(未刊行)
 樋口輝彦・斉藤万比古(監修) (2012). 成人期ADHD 診療ガイドブック じほう
 金澤 潤一郎 (2013). 成人期のADHD患者に対する補償方略の獲得をターゲットとした心理療法の検討. 北海道医療大学大学院心理科学研究科博士論文
 金澤潤一郎・白川玲奈・岡島 義・中野倫仁・坂野雄二

- (2009). 成人のAD/HD傾向者の神経心理学的特徴の検討—Wender Utah Rating Scaleを用いて—. 日本行動療法学会大会発表論文集, **35**, 254-255
- 川上憲人・近藤恭子・柳田公佑・古川壽亮 (2004). 成人期における自殺予防対策のあり方に関する精神保健的研究. 平成16年度厚生労働科学研究費補助金(こころの健康科学事業)「自殺の実態に基づく予防対策の推進に関する研究」分担報告研究書, 1-23.
- 国立特別支援教育総合研究所・日本学生支援機構 (2009). 高等教育機関における発達障害のある学生の支援に関する研究—評価の試みと教職員への啓発— 国立特別支援教育総合研究所
- 栗田広・長田洋和・小山智典・金井智恵子・宮本有紀・志水かおる (2004). 自閉症スペクトラム指数日本語版(AQ-J)のアスペルガー障害に対するカットオフ 臨床精神医学, **33**, 209-214.
- 中村和彦 (2016). 大人のADHD臨床—アセスメントから治療まで— 金子書房
- 日本学生支援機構 (2014). 平成25年度(2013年度)大学, 短期大学及び高等専門学校における障害のある修学支援に関する実態調査結果報告書
- 大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討. 教育心理学研究, **53**, 307-319.
- 大久保純一郎 (2015). アカデミックスキルの評価と注意欠如/多動性障害傾向. 帝塚山大学心理学部紀要, **4**, 109-114.
- 篠田直子・沢崎達夫 (2012). ADHD特性をもつ大学生の特徴と大学生生活への適応 目白大学心理研究, **8**, 49-62.
- 篠田直子・沢崎達夫・石井正博 (2013). 注意に困難さのある大学生への支援プログラム開発の試み 目白大学心理学研究, **9**, 91-105.
- 館農幸恵 (2013). 児童・青年期から成人期におけるADHDについて 精神経誌, **115**, 234-239.
- 遠矢 浩一 (2002). 不注意, 多動性, 衝動性傾向を認識する青年の心理・社会的不適応感—必要な心理サポートとは何か?— 心理臨床学研究, **20**, 372-383.
- 山崎晃資・木村友昭・小石誠二・朝倉新・大屋彰利・林田浩美・安枝三哲・佐藤慎子・松本辰美・中村優里・煙石洋一・加藤由起子・渥美真理子・猪股丈二・松本英夫 (2002). 注意欠陥/多動性障害の評価尺度の作成と判断能力に関する研究—ADHD Rating Scale-IV 日本語版の標準値—. 注意欠陥/多動性障害の診断・治療ガイドライン作成とその実証的研究: 研究報告書, 23-25.

Influence of AD/HD properties on feeling of difficulty in the college life

Makoto IMANISHI and Junichiro OOKUBO

Abstract

This study clarifies percentage of possible ADHD college students who recognize his/her ADHD attributes. Relevance of ADHD attributes to their difficulty on college life and kind of effective support for them were also considered. As the result, 25.80% of a college student in kinky area found to be ADHD. In addition, it was implicated that these students have feelings of difficulty on things important to lead college life, Such as on study or on interpersonal relationships. Furthermore, although ADHD students who recognize their difficulty and who were supposed to not were both found, it was proved there was no reminder of each mean values of ADHD attribute, strength of feelings of difficulty and intensity of depressive trend between the two ADHD student groups. In free descriptions, comments need concrete advices to deal with difficulties were often seen, which showed their current solutions were not adequate nor effective. Therefore, the need of skill developmental program to review their current solutions and to adequately cope with difficulties, not just a piece, was implicated.

Key words : AD/HD tendency, college student, difficult sense